京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

誰もが誰かを放っておかない社会

京都市立洛北中学校　三年　北村（きたむら）　結菜（ゆな）

これは以前、私が委員会の役割で、修学旅行で行う平和宣言の作成を担当していたときの出来事だ。その平和宣言は、学年全員分の思いをつめこむ、いわば集大成だった。なので、私を含む担当の三人で何度か集まり、かなり相談しながら書き上げた。「平和」をうたう文を書く、ということで、完成したものにはそれなりの正義感と自分たちの信じる理想がのせられていたと思う。「これが正しいんだ」というある種の自信もあった。

しかし、完成したものをいざ提出すると、返ったのは大量の赤い添削が入った原稿だった。それに加え先生は私の考えが汲まれた箇所を読んでの違和感を指摘した。今思えば先生は私の少しの考え違いを教えてくれたのだろうけれど、自分よりまっとうな意見で、自分の信じていたことを「これちがうんじゃない。」と言われたのは、当時の私にとって一番キツかったのだ。頭をガツンと殴られるようなショックで、でも自分の手で心臓をしぼられるようないたたまれなさがあった。

そんなこんなで、教室に戻ったとき、私は思わず涙をこぼしてしまった。運の悪いことに次の授業は全校集会。クラスメイトが集まり並ぶ中で、一人の涙は誰かに気づかれる。

「泣いてるっ!?」

「大丈夫?」

心配されると気丈にふるまうしかない。

「泣いてないっ!大丈夫。ごめん。」

どうか放っておいてほしい。声をかけてくれるな。親しい人でも今は話せない。どうしても冷たく対応してしまう。体育館へ行く同級生一人一人を避けていこうとした。

けれども、放っておいてくれなかった友人がいた。

「えっ泣いてる?大丈夫かあんた。アカン。どう見ても大丈夫じゃないやつに大丈夫かってきいたらダメやねん。えー泣いてる。珍しい!わかったわ、あのキャラクターが好きすぎて泣いてるんやろ。当たり?ハハッ。言いたくなかったら言わんでも良いけど。先生か、平和宣言かー?キツイ言うてたしなー。」

話すこともままならない私にかわってその友人は私に話し続けた。彼女もとまどいが大きかったのだと思う。不器用にも程があって、話すことが全て突拍子なく、意味がわからない。先生に言われた言葉で真っ白、そしてぐちゃぐちゃになった頭でも、その友人の話にはツッコみを入れるしかなかった。散々な気持ちの中で彼女がくれた笑いはその時の私の一番のよりどころになってくれた。

きっとこのとき、彼女が私を放って先に体育館に向かっていたら、私はその日の帰りもろくに家路につけなかった気がする。それ程その友人が私を放っておいてくれなかった。放っておかなかったことは、大きいことだった。何様だ、と思うけど、その行動が私にとっての一番の正解だったと言えるのだ。

さて、原稿用紙三枚にもわたってこの話を書いたのにも、しっかり意味がある。この作文は「非行、犯罪のない明るい社会」を目指す運動のためのもの。

そうして考えると、前の話で一人の友人が私を放っておかなかったことは非行や犯罪の抑止にも通じると思えた。彼女が私と一生懸命話そうとしたのは、「泣いてほしくない」と思ってくれたからだと思うのだ。その思いを不器用にも伝えてくれたおかげで私は「前向きでいよう、泣かないでいよう」と気持ちをきりかえられた。それは、もしも犯罪に手を染めようとした時でもきっと同じで、

「○○のことが大切。」

「苦しんでほしくない。」

「泣かないで。」
「笑ってほしい。」
そんな思いを持ってくれる人がいれば、伝えてくれる人がいれば、おのずと手を引いて足を洗おうと思えるのではないか。私が犯罪や非行をしたくないと思うのも大切に思ってくれる友人や家族や先生がいるからだ。嫌な言い方かもしれないが、人とのつながりは自分を社会と結びつける鎖といえよう。

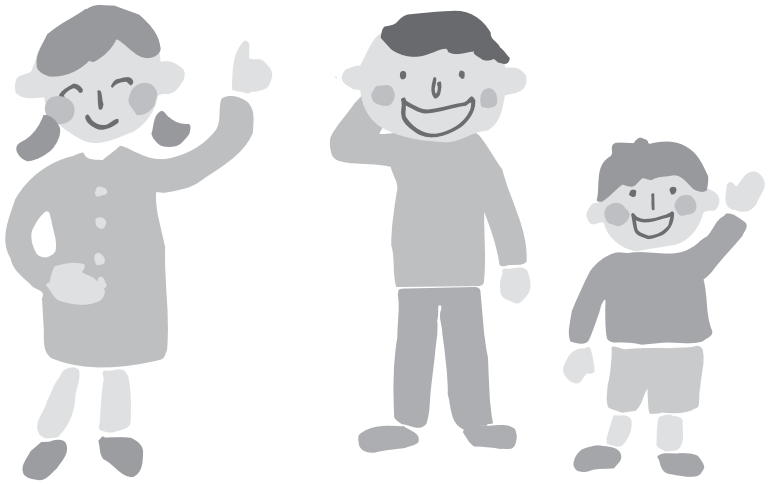
だから、この作文での結論はこうだ。

誰もが誰かを放っておかないことが犯罪や非行をなくす鍵になる。一人でも何人でも自分を大切に思う人、がいることを実感できると良い。それは社会を生きる力になり、心のよりどころになれる。

正直きれいごとに思えるけれども、私は私を元気づけてくれた友人は正しい、と信じているのだ。

さて結論を出したからには実行に移したい。まずは近くにいる人に、それからクラスの人や先生や地域の人におはよう、と挨拶を。泣いている人を笑顔にしよう。もし近くの人が一人で正しい道からそれていっても放っておかない。伝えられれば、伝わればいいのだ。

君が、あなたが大切なのだから、と。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

「その一言で」

京田辺市立田辺中学校　三年　川本（かわもと）　陽也（はるや）

家族、学校、地域、社会……世の中には人間関係にまつわるさまざまな問題があふれている。それぞれが生きている場所で、数えきれないほどの課題、生きづらさなどを抱えている。では、自分にとってのテーマは何か。考えたが、ペンを握ったまま動けなくなってしまった。

一向に考えが浮かばず、諦めて自分のスマホを手に取った。いつものように動画サイトを開け、好きな映像をのんびりと見ていた。コメント欄には、「おもしろい！」「楽しそう」といった言葉で溢れていた。そんな中、ある一つのコメントに目がとまった。「おもんない。さっさと投稿辞めちまえ。」

「バカだな。このコメントこそおもんない。」そう思いながら画面をスワイプした。スマホを置き、再び机に向かった。目の前から消えた、さっきのコメントが思い出された。たくさんの中のひとつの感想に過ぎない。しかしその一言で、一体どれほどの人の気持ちを暗くさせただろうか。コメント自体は、動画投稿者に向けられた言葉だ。自分にではない。しかし、僕の心に重くひっかかった。

コメントを書いた人の視点で考えてみた。誰かを楽しませよう、笑わせようと投稿された動画。多くの視聴者も喜ぶ。しかし、自分にとっては「おもしろくない」のだ。そもそも、全員がおもしろいと思う動画などない。当たり前のことだ。ただ、その自分の意見をそのまま相手にぶつけることは正しいのか。インターネットという匿名性の高い世界で、一方的に攻撃ができてしまう。自分の思うまま、無差別に凶器を振り回しているのと同じだ。

逆に、そのコメントを読んだ投稿者の視点になってみよう。「悲しい」「一生懸命考えて作り上げた動画なのに。」言葉を投げつけた相手は誰だか分からない。たくさんのコメントの中の、たった一人の意見だったとしても重苦しい気持ちを背負って過ごすことになってしまうかもしれない。もちろん投稿者だけではない。そのコメントを目にした視聴者も同じように傷ついてしまう可能性がある。投稿者同様、悲しみ、やり場のない怒りを抱えるだろう。では、その怒りをまたコメントをした人に向けるだろうか。向けていいのだろうか。そんなことをしても、さらに傷口が広がるだけだ。これが今のインターネット世界の現状なのだ。

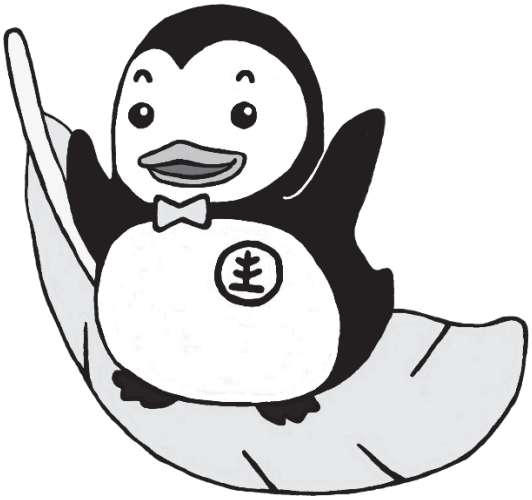
目の前のコメント。どうすればいいのか。僕はコメントをもう一度見た。一件の返信がついていた。それは投稿者からだった。「そういう意見もありますよね。参考にさせてもらいます。」

端から見れば、投稿者は非常に冷静な対応をしている。ひょっとしたら、その裏では、悲しみを抑えてコメントをうつ姿があったのかもしれない。投稿者も、誹謗中傷する人も、顔、姿が見えないから本当のところは分からない。でも、傷つける言葉を吐くのではなく、一旦は相手の意見を受け止めてみる。こういう返し方もあるのか、と驚いた。

実は、僕も似た経験をしたことがある。ある人から嫌がらせをされていたのだ。嫌がらせを受け、僕は仕返しという名目で相手を必要以上に攻撃した。「相手が嫌がらせをしてきたのだから、僕は悪くない。むしろ正しい。」と思い込んでいた。状況は異なるが、「傷つける人への対応」という点ではどうだろう。「自分は正しい。自分は傷つけられたからやり返してよい。」と盾を構えて、安全な場所から相手を攻撃する。僕を含め、そういう人が身の回りに増えていると思う。

インターネットの世界で、誤った行動をする相手を止め、注意することは難しい。それならば、せめて、傷ついた人に寄り添う、手を差しのべることならできるかもしれない。投稿者への感謝や応援

といった形で。「ありがとう。」「これからも頑張って。」温かい言葉は、中傷の言葉よりも心に響くはずだ。そして、もしかしたら、優しい言葉を目にした人たちが、さらに優しい言葉を届けていくことも考えられる。インターネットの世界に必要なのは、過ちを犯す人、犯した人を排除し、叩き潰すのではない。嫌な思いをした被害者を励まし、支えていくことなのではないだろうか。もちろん、被害者、加害者にかかわらず、誰に対してもいえる。これからの社会を担う僕たちが、発するべき言葉は、血の通った言葉、相手を包み込む言葉だ。そして、それはＳＮＳやコメント欄だけでなく、現実の世界でも同じだ。家庭で、学校で、地域で、社会で、「ありがとう」「一緒に頑張ろう。」何気ないその一言が世界を変えていくのだ。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

被害者にも加害者にも寄り添える社会

精華町立精華西中学校　一年　野村（のむら）　怜花（れいか）

私の、いじめに対する考えを変えた言葉がある。

「どうしていじめられてる方が逃げなきゃならないんでしょう。欧米の一部ではいじめてる方を病んでると判断するそうです。いじめなきゃいられないほど病んでる。だから隔離してカウンセリングを受けさせて癒すべきだと考える。」

これは、あるドラマの主人公がいじめに関して語ったときの言葉である。

でも、いじめの加害者がなぜ病んでいるんだろう。加害者が悪いことに変わりはないし、病んでいたとしてもなぜいじめにつながるのか初めはわからなかった。考えた結果、もちろん、遊びがエスカレートしていることもあるだろうが、加害者が実は病んでいて、ストレスを発散しようとすることがいじめになってしまうというケースもあると思った。その場合、加害者は別の誰かにストレスを与えられた被害者なのかもしれない。

私は以前、いじめの加害者が全て悪く、被害者がカウンセリングの治療を受けて立ち直るべきだと思っていた。しかし、この言葉により、加害者は実は問題等を抱えていて、被害者はもちろん、加害者にも社会は寄り添っていかなければならないのかもしれないと思うようになった。

ただ、犯罪やいじめがあった時、今の社会は以前の私の考えと同じような対応になっているように思う。犯罪やいじめの被害者の方に寄り添っている方が明らかに多く、根本的な解決にいたっていない。私も、被害者への支援が最優先だと思うが、加害者へのケアがもっと必要だとも思う。加害者が社会に見放されたままだと、加害に至った経緯が明らかにならず、「このような事件が起きた」という事実だけが報道されてしまう。それをなくすためには、もちろん加害者に適切な処罰を下したうえで、誰かが加害者の話を聞き、その人のことを考え、ケアすることが必要だと思う。

社会におけるいじめと犯罪への対応の仕方の違いについても考えた。私は、社会はいじめより犯罪の方を重視していると感じる。確かに、いじめに比べると、犯罪は人々の生命や生活を直接脅かすものが多い。そのため、加害者が裁かれたり、刑務所に入れられたりする法律が作られている。さらに、犯罪者は刑務所で更正したのち、保護司に再び罪を犯さないよう、立ち直りを支えてもらえるような制度まである。一方、いじめの加害者はカウンセリングなどに相談できるが、あまり活用できていないように思う。しかし、いじめも、被害者の当然あるべき日常を脅かすという点で、「犯罪」であるとも言える。そんないじめを軽視してもいいのだろうか。いじめの加害者が社会から放置され、間違った道を進み続ければ、大人になって犯罪という形でまた被害者をつくり、人生を狂わせてしまう。社会はもっといじめの加害者の治療を考えるべきだ。

外国では「犯罪学」という学問が大学で学べるそうだ。犯罪学とは、犯罪をなぜ起こしてしまうのか、犯罪に至るまでの経緯などの法則性を発見し学ぶ学問だそうだ。日本にも数は少ないが犯罪学を学べる大学がある。犯罪の原因や経緯を知れば、加害者の抱えた思いが見えてくる。犯罪学を学べば、少しは加害者の思いが私たちにも分かるかもしれない。その法則が絶対というわけではないが、パターンを知ることで、少なからず加害者の心情を考える人が増えると思う。それは犯罪の裏側を考えるということだ。表側だけでは、加害者がどんな事件を起こし、被害者がどうなってしまったかぐらいしかわからない。しかし、加害者に秘められた感情や悩み、被害者と

加害者の関係など、犯罪にはたくさんの裏側が存在し、それを知らない限り加害者がすべて悪いと決めつけてはだめだと思うのだ。

私はこれから、いじめや犯罪の裏側を考え、犯罪の真相を知る第一歩を踏み出したい。犯罪者に対する態度や考えを多くの人が変え、その考えをもとに対応をしていけば、社会はより良くなっていくと思う。

最近の犯罪の再犯率は、起こった犯罪の半分ほどにもなっている。いじめという罪が犯罪に発展する前に青少年を良い道に導き、犯罪者への対応や支援を社会が考えていくことで、犯罪の発生率も再犯率も減少するだろう。

日本は現状、いじめの被害者にはケアすることと逃げさせることをうながし、加害者には罪を与えることだけをしているように思う。この現状を変え、犯罪やいじめを減らすためには、被害者だけでなく加害者にも寄り添うという考えを社会がもち、対策を講じることが大切だと思う。そうすることで、被害者も加害者も、そうでない人々も良い道に前進できる、明るい社会になると私は考える。